

1987年2月28日

## 野鳥映画について—提言

私が野鳥映画に手を染めた昭和30年頃のことを思い返してみると、当時は16ミリ映画フィルムのネガカラーはまだなかったし、カメラも手廻しやぜんまい仕掛けが主で、フィルムマガジンも100フィート巻きだけであった。望遠レンズにしてもせいぜい100ミリが関の山。

それからみれば今ではカメラは総て電動式だし、マガジンも400フィートを装填できる。レンズにしても1,000ミリの超望遠から、20倍ズームまでが一般化し、更には赤外線による暗視野レンズやファイバースコープ応用の内視鏡までも駆使できるようになった。16ミリネガカラーフィルムも、ASA320の高感度ものさえ市販され、その上現像の段階で3倍位の増感が可能などころから、少々の光量不足ぐらいは問題にならない。だから今では優秀な作品を生み出す物質面の条件が十分に備わっているわけだ。

一方近年急速に失われゆく自然への郷愁から、自然志向の風潮も高まり、それに伴って野生生物を扱ったテレビ番組が視聴率を高めつつある。そこで放送局や記録映画プロダクションでは、国内はもとより海外ロケも頻繁に行うようになり、野鳥に限らず野生生物を対象とする映像の取材を競い合っている。

記録映画とは、撮影対象として扱えたものをそのまま見る人に伝えるものであるが、ニュース映画とは異り、製作に先立って意図が明確にされている。撮影の段階でも、カメラアングルやサイズなどが、一応製作意図を体してきめられる。然しそれでも幾つかのカットの中から最も確に意図を表現するものだけを選び出して編集するのであるから、撮影に当ってはなるべく多くのカットを用意しておくことになる。しかも対象とする相手が言葉の通じない野生生物ときている。その結果、この種の映画の場合、NG率(使用ネガと仕上げの長さの比率)は少くも6倍は計上され、場合によっては8倍から10倍も見込まれることがある。

従ってカメラNGは別にしても、編集に際して多くのカットが取捨選択の諦にかけられる。そして従来、多くの場合はこれらの不使用カットは借し気もなく破棄されていた。然し近頃ではこれを整理保存するようになり、それらの中には住々にして、又と得難い貴重なものもあるし、使用目的に叶えば他の映画に充分流用できるものがあるに違いない。現に、私共の所にも「これこれの鳥のしかじかの場面があったら使わせてくれないか」といった要請がしばしば舞い込むし、また我われとしても同じような要望を持つ場合がないとはいへぬ。

そこで私は思いつくままに一案を提示する。つまり、各プロダクションが個々ばらばらに抱えている不使用カットのうち、せめて鳥に関するものだけでも、内容を詳記したリストを作り、どこか1か所に纏めて登録しておいて、情報センターとしての機能を果たし得るような仕組みを設けてはどうか、ということである。

川田 潤



## 映 像 記 録 (2)

### 続・草創期の日本野鳥生態映画

松 山 資 郎

ここに記した題名の映画は、野鳥が写っていて楽しく見たものである。だが、あるいは鳥類研究者からは「生態映画」の部類には入らないと、いわれるものがあるかも知れない。また、記録映画作家とか、映画評論家など映画の玄人筋からは、別の異論が出るものが入っているかも知れない。それはそれとして、「野鳥生態映画」のわが国における草創期ともいうべき、大正年間のものには、題名だけで内容がわからないものがあり、それらは割愛した。

ここでは、昭和の初めから32～34年ごろまで、「鳥類の生態映画」とか「記録映画」、あるいは「教育映画」といわれたものを記すことにした。昭和初期のものなかに、内容の記録がないため、題名だけからでは内容を思い出せないものもある。大戦後から昭和30年代半ばごろまでのものは、新聞、雑誌、映画会社の宣伝パンフレットなどで、内容がよくわかるものが多い。しかし、ほとんど撮影された年月はわからないので、何んということなく、次の4つに分けて題名だけを示す。

1. 農林省鳥獣調査室所蔵  
鳥獣調査室で自作した映画と、日本の映画会社で製作した映画を購入したもの。
  2. 個人で演出撮影されたもの  
〈塚本閑治氏撮影〉
  3. 映画会社が製作したもの  
〈理研映画株式会社〉(脚本演出下村兼史氏)
- |                    |           |                       |            |
|--------------------|-----------|-----------------------|------------|
| 燕島「ウミネコ」蕃殖地        | 鴨場の鴨雛     | 鴨雛                    | 佐土島(佐渡)外海  |
| 水尻島蕃殖地の実況          | 小笠原の島     | 小湊村の大白鳥               | 府のウミネコ     |
| 鹿児島島鶴の渡来地          | 農林省鳥獣実験場生 | 青森県鮫港無島ウミ             | 木曾御嶽のライチョウ |
| 八代村鶴の渡来地           | 産種雑配布状況   | ネコ                    |            |
| 白鳥                 | 動物の園      | 〈山階芳麿氏撮影〉             |            |
| 千島の鳥獣              | 孤島の楽園     | 鳥島のアホウドリ              | 新浜御嶽場      |
| 埼玉県鷺山              | 乗鞍岳の雷鳥    | 黒田家羽田鴨場               | 富士山麓の鳥類    |
|                    |           | 〈中村民男氏撮影〉             |            |
|                    |           | 千葉県大巖寺のウ              |            |
|                    |           |                       |            |
| 外国の映画会社で製作したものを購入。 |           | 3. 映画会社が製作したもの        |            |
| 飛禽の群               | 雉の養殖      | 〈理研映画株式会社〉(脚本演出下村兼史氏) |            |
| ニトビリカとペリカン         | 鳴禽の群      | 或る日の干潟                | 僕等の巣箱      |
| 雷鳥                 | 鳥の楽園      | 水鳥の生活                 | 石の中の鳥—千鳥の  |
| 鳥の生態各種             | 鳥の祖先      | 慈悲心鳥                  | 生態         |
| 白鷺の保護              | ザンバ       | 山麓の鳥—富士山麓             | 鶴の首はなぜ長い   |
| 合衆国国立鳥類保護区         | ロアロア      | 〈新理研映画株式会社〉           |            |
| 鳥の生活               | 養雉場       | わたり鳥                  | 大自然にはばたく   |
| 梟                  | 珍獣奇鳥      | 野鳥の生態(企画林野庁)          | 水辺の鳥       |
| 北極の鳥獣              |           | 〈日映科学映画製作会社〉          | 巣箱         |
|                    |           | 〈東映株式会社〉              |            |
|                    |           | 富士は生きている              | 春の流れ       |
|                    |           | 白鳥物語                  |            |
|                    |           | 〈東宝株式会社〉              | ちどり(教育映画)  |
|                    |           | 〈世界文化映画株式会社 奥商会〉      |            |
|                    |           | 皇居の水鳥                 | 鶴の来る村      |
|                    |           | 〈読売映画社〉               |            |
|                    |           | 鷺のふるさと                | 秘境ヒマラヤ(カメラ |
|                    |           |                       | が捕えた鳥葬)    |

- |               |            |                      |
|---------------|------------|----------------------|
| <共同映画社>       | 鳥島のおほうどり   | 4. その他               |
| <全国農村映画協会>    |            | <撮影 林田重雄> 南極大陸       |
| ムクドリ          | とりのからだと生活  | <外国映画>               |
| (監修 黒田長久氏)    | (監修 高島春雄氏) | ウォルト・ディズニー、ウファ、クルトウ  |
| <日本視聴覚教材株式会社> |            | ール、ソ連、イタリア、ハンガリーなどで製 |
| つばめの親子        | 野山の小鳥      | 作した映画も輸入、上映されている。    |

お願い：乏しい資料を基に、題名を並べてはみたが、独断と偏見で、見落としや大きな誤りなどがあると思います。もし、お気づきのことがあれば是非教えて頂きたいをお願いします。

## 学研製作による鳥の映画 岡田 泰 明

株式会社学研(通称学研)は、学習雑誌を主体とする教育出版社として1946年に発足したが映画部を設けて第1作「カニの誕生」を世に送ったのは1955年のことである。それから約30年、作品総数は1000本に近くなったが、鳥の映画といえるものは非常に少ない。これは、学校教育や社会教育の教材として、鳥が表立ってとりあげられることが、ほとんどなかったためである。この状況が変わらない限り、今後も学研に限らず、教育映画メーカーによって鳥の映画がたくさん作られるという時代は来ないと思う。

今回、当誌の請により、少ない中から多少無理して拾い出した14作品を、以下に製作年順に並べてみた。企画や後援などについて特に記していないものは自主作品である。なおこれらのフィルムは、地域の教育機関の視聴覚ライブラリーに入っていれば、そこから借用して見ることができる。また購入を希望される場合は(ビデオ版も含めて)下記へ問い合わせいただきたい。

株式会社学研 情報機材事業本部

〒146 東京都大田区仲池上1-17-15 電話 (03) 726-8568

### 【作品リスト】

「冬の鳥—観察と保護—」 1961年  
パートカラー 17分 小学校理科

今でいう「ミニサンクチュアリ」あるいは「庭に小鳥を」を主題とした日本ではおそらく初の映画。監修は山階芳麿先生。庭の餌台や水場に来る鳥を中心に、野鳥保護と給餌の問題を子供向けにやさしく解説している。巻末のカラー部分では北海道のタンチョウ、瓢湖のハクチョウ、不忍池のカモなど、野外での給餌例をとりあげる。不忍池のカモ群が当時はオンドリが圧倒的に多かったことが今から見ると珍らしい。

「森林の生物」 1961年  
カラー 15分 小学校理科

当時の同名の単元に沿った6年生向け教材。

森林の中の植物、昆虫、鳥、哺乳類などを紹介的に見せた映画。鳥はシジュウカラ、ビソズイなど少ない。

「つばめのかんさつ」 1962年  
白黒 19分 小学校理科

監修は黒田長久先生。指導の金井郁夫先生のフィールドであった八王子市郊外が舞台。孵化のようす、卵殻を捨てる親、巣立ち後のひなの就鳩、集団鳩の夜間シーンなどが当時は珍らしがられた。集団鳩は福島県郡山市の五百湖のアン原で、地元の水野忠次郎さんの協力で撮影した。電源がなく、フライヤーという大型花火のような映画用照明具をたいたため、大ぜいの見物人が押しかけた。

「尾瀬」 1962年  
カラー 30分 文化財保護委員会企画一般

——特集・映像記録(2)——

原版は35ミリ撮影。尾瀬の四季を詩情豊かに描いた作品で、同年度の芸術祭賞を受賞し、尾瀬ブームの火つけ役のひとつとなった。植物、昆虫が主体で、鳥はアオサギ、イワツバメ、カモなど少ない。

「北海道の自然」 1964年

カラー 30分 三和銀行企画 一般

日本の国立公園シリーズとして、教社が地域を分けあって競作したうちの一本。道内の四つの国立公園を風景主体で紹介している。鳥は知床沿岸のハシボソミズナギドリの大群が出る程度。

「動物の生態—ウミネコの生活—」 1965年

カラー 18分 文部省企画 高校理科

監修は浦本昌紀先生。繁殖期のウミネコの生活を、青森県黒島で、現地の成田憲一先生の指導のもとに撮影。巣から迷い出たひなが、まわりの成鳥たちにつつき殺されるシーンが話題となった。後半では北海道の天売島で、ウミネコと他の海鳥(ウミガラス、ウトウ、ケイマフリ)との時間的、空間的な住みわけに言及している。

「生きている海岸線」 1967年

カラー 30分 千葉銀行企画 一般

内房と外房を舞台に、沿岸性の海洋生物の多様さを描く。映画界ではこのころから水中撮影がさかんになった。鳥は干潟のシギ・チドリ類がいくらか登場する程度。

「ダーウィンの進化論とガラバゴスの生物」

1971年 カラー 14分 高校理科

短篇映画界では、ガラバゴスへ特派取材した初めてのケース。鳥ではダーウィンフィンチ(数種)、カツオドリ類(3種)、グンカンドリ類(2種)などのほか、ガラバゴスペンギン、ガラバゴスノスリ、コパネウ、アカモカモメなどの特産種が登場する。

「自然のつりあいと保護」 1972年

カラー 20分 中学・高校理科

70年代のエコロジブームを背景に、環境汚染の犠牲者としてコサギの例を出している。当時野田の鷺山はすでになく、小杉昭光先生の指導で渡良瀬遊水池近くのコロニーを撮影している。

「動物の行動をさぐる」 1972年

カラー 28分 高校・一般

昆虫、魚、鳥を例に、主として繁殖にかかわる行動を野外実験で解析する。鳥は狩野康比古先生の指導のもと、北海道大黒島のオオセグロカモメの親子関係、特にその音声コミュニケーションをさぐる。

「ひなにとって親とはなにか」 1974年

カラー 20分 高校・一般

ローレンツの「馴れ込み理論」をアヒルのひなで実験的に映像化したもの。巻末に上高地明神池で繁殖するマガモのシーンがある。監修は浦本昌紀先生。

「野鳥とともに」 1978年

カラー 32分 日本野鳥の会企画 一般

ドラマ。新興住宅地にマイホームを持った一家が、餌台や水場を作ったり、採鳥会に参加したりするうちに、野鳥愛護と自然保護に目ざめていく。大井野鳥公園や高尾山の採鳥会風景、都会の庭や山の水場に来る鳥が織り込まれている。タイトル題字は中西悟堂先生。

「ツバメの生活」 1982年

カラー 15分 小学校理科

前記「つばめのかんさつ」のカラー新版。対象を低学年に落とし、身近な巣で観察することに重点を置き直している。学問的な面での指導は内田康夫先生。

「干潟の詩(うた)」 1984年

カラー 31分 自然保護協会企画 一般

ドラマ。沿岸漁業に生きる老漁夫と都会に出て行った息子夫婦、孫娘と地元の少年など、登場人物の劇的なからみを通して、環境問題や一次産業について考えさせるストーリー。干潟のシギ・チドリ類が若干出る。

## テレビ番組・16 $\frac{mm}{m}$ フィルム・ビデオ で見られる鳥の生態

群像舎(〒162 東京都新宿区岩戸町10松  
本ビル202 TEL 03-267-3997)

幻のニホンイヌワシ(60分, 1985年), 東京の空に羽ばたけ! オオタカのヒナ4羽(40分, 1985年), 海鳥1万羽が乱舞する! 南海の孤島・仲の神島は子育ての楽園(40分, 1986年)……その他の作品を含め東京放送, 毎日放送, 日本テレビなどで放映されている。

岩波映像販売㈱(〒101 東京都千代田区三  
崎町2-21-4 TEL 03-261-3673)

ヤンバルクイナの親子〜頑張れ! 3羽のヒナたち(25分), タンチョウゾル親と子の絆(25分), 雷鳥・アルプスの四季(25分)[以上「生きものばんざい」シリーズ, 16 $\frac{mm}{m}$ ・ビデオ] 雷鳥の四季(30分, 16 $\frac{mm}{m}$ )……その他, テレビ番組「生きものばんざい」(毎日放送)は鳥関係タイトルだけで92編あるので, 今後一般的に利用できるようになる可能性がある。

ジェー・ピー・エル㈱(〒150 東京都渋谷  
区宇田川町37-10 TEL 03-469-3227)

青い月夜の浜チドリ(1982年), 伊良湖岬をタカ渡る(1982年), 白銀の阿寒・ツルの舞い(1983年)……「自然ワンダフル」(テレビ東京)シリーズの鳥関係タイトルだけで21編ある。

日本放送協会(NHK)(〒150 東京都渋谷  
区神南2-2-1 TEL 03-465-1111)

「自然のアルバム」「ウオッチング」「日本動物記」「日本の自然」「自然見つけた」などの他, 「クローズアップ」「NHK特集」などにも鳥関係の番組がある……タイトル数が多すぎて紹介できない。今のところ一般に利用できるような形は少ない。

プロダクション未来㈱(〒166 東京都杉  
並区高円寺北2-39-14 TEL 03-338-5926)

オオジシギを扱った, 10,000kmの架け橋(47分, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1986年)の他, アオサギの森—ある生態観察(20分), 野鳥の森—菊池溪谷の野鳥(27分)などがある。その他, 野鳥のすめる庭づくり, 欧米の野鳥保護などのビ

デオを販売している。

【フィルム・ビデオを貸し出している団体】

日本環境協会(財)(〒105 東京都港区虎ノ  
門1-5-8 オフィス虎ノ門1ビル5階  
TEL 03-508-2651)

海鳥の島—北海道(45分, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1972年), 特殊鳥類—その記録(1)~(5)(20分前後, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1980~84年), ヤンバルの鳥たち(20分, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1985年)など鳥関係タイトルだけで19本ある。送料だけで借りることができ, パンフレットも郵送してくれる。

日本鳥類保護連盟(財)(〒150 東京都渋谷  
区宇田川町37-10 TEL 03-465-8601)

国鳥 キジ(30分, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1981年), 東海の野鳥たち(33分, 16 $\frac{mm}{m}$ , 1975年)の2本を送料だけで貸出している。

下中記念財団 EC日本アーカイブズ(財)  
(〒102 東京都千代田区三番町5 平凡社内  
TEL 03-264-3209)

EC(エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ)フィルムは科学映画の百科事典といえるもので, 日本では上記で収蔵している。貸出しには条件があるので問合せること。

この他, 東京国立近代美術館フィルムセンター(〒104 東京都中央区京橋3-7-6  
TEL 03-561-0823)には古い映像が所蔵されている。またテレビ番組としては「野生の王国」(毎日放送)「わくわく動物ランド」(東京放送)が毎週放映している他, 「知られざる世界」「驚異の世界」「Time 21」(日本テレビ)「ふれあい自然列島」(毎日放送)でも鳥関係のタイトルがある。

※ このリスト作成にあたっては, 次の方の協力をいただきました。(敬称略)

安藤正治, 長谷川博, 岩崎雅典, 川田潤, 菅野 均, 久保田義久, 大橋邦宏, 杉浦嘉雄  
スペースの関係上, 紹介が一部になってしまいましたので, もう少し詳しく知りたい方は編集部にお問合せ下さい。(川内 博)

鳥獣捕獲許可申請にかかわる  
長谷川氏の一文に寄せて

樋口 広 芳

何か月か遅れて届いた「鳥学のニュース」№20中の長谷川博氏による「鳥獣捕獲・鳥類卵採取許可の申請」(p. 3~4)の一文を読んで、少々気になるところがありました。文中、中ほどの「もうひとつ大切なことは……公的性質をおびていることを示すことである。……公的な調査研究活動であることを示すとよい。」という部分です。

日本ではいわゆる専門家の数は少なく、多くの人はアマチュアとして鳥を研究しています。また、どこの機関にも所属せずに鳥の研究を主な仕事にしている人もいます。このような人にとっては、自分の研究が“公的な調査研究”であることを示すのは大変なことです。

たとえば小、中学校の先生の場合、直接本務とは関係ないということで、校長から推せん書、というより副申書をもらうことができない場合があります。かといって、特に地方に住む人にとっては、学術団体の代表者(たとえば鳥学会の会頭?)から、長谷川氏のいうように「会って研究計画をじっくりぶんに理解してもら」った上で、副申書をもらうというのは大変なことです。

また、“公的性質”、“公的な調査研究”ということばは、誤解を招きやすいことばです。たとえば、もし学会の代表者がある人の副申書を書いたとして、それが“公的な調査研究”であることを示したとなると、その人が不幸にして違反行為をしたような場合(指定以外の場所で指定以外の鳥をとるなど)、学会が責任(の一部)を負うということにもなります。

重要なことは、「公的性質をおびていることを示す」のではなく、その研究が確かに意義あるものであり、そのために捕獲が必要であること、またその捕獲が適切におこなわれるであろうことなどを、識者に副申してもらうことです。この場合の“識者”は、できれば関係機関の所属長であるべきですが、必ずしもその必要はなく、関連分野の大学教官や学会の評議員などでもよいと思います(お役所もそれを認めています)。

私がわざわざこれを書いたのは、学会で出している出版物に書かれたものは影響力が大きいからです。もし、お役所が“公的”であることを重視して、副申書または推せん書がその意味で扱われることにでもなったら、多くのアマチュア研究者にとっては不幸なことです。捕獲申請が十分に審査されるべきことはいうまでもありませんが、不自然にきびしくなるのも問題です。長谷川氏が書いているように、卵を手にとるにも許可が必要ですが、申請が面倒あるいは困難ということで、申請せずにやってしまうというようなことが起きたら、残念なことです。あの部分は、もう少し慎重に書いてほしかったと思います。(在 ミシガン)

## 意見に答えて

長谷川 博

樋口氏の意見の背景をなす考えかたはもっともで、建設的です。不幸にも私は“副申”という言葉自体(国語辞典にこの語はみつからず、行政や法律関係の専門用語のようです)、また彼が指摘したような例を知らなかったのです。批判された文は、その前段でことわっているように、私自身の経験にもとづいています。

この種の文は実際に行政にたずさわっている人に解説してもらうのが一番よいと、「鳥学=ニュース」編集者として私は判断し、知りあいの2、3人に口頭で原稿を依頼しました。しかし、たぶん私の説明のしかたが不十分だったのでしょうが、消極的な返事しか得られず、無理にお願いできませんでした。それで「現状変更」の頃とは違って、私が書かなければならなくなっ

でしまったのです。私自身が適任ではないことを認識していたので、はじめのところで、行政担当者や知りあいの鳥学会会員に相談して助言を得るのがよいと説明しておきました。

確かに「公的性質」は誤解を招く言葉です。私自身は以前にこのようなことを言われたのです。それ以来、許可申請の時にはいつも、しっくりしない気持のまま、学部長の「推薦書」を添えて書類を提出してきました。推薦書あるいは「副申書」は必須条件ではないようですが、それを添えたほうが円滑に事務処理されるでしょう。前に書いた一文が、許可申請はめんどうだ、という印象を読者にうえつけてしまったならば、それは私の失敗です。行政担当者は学術研究のための捕獲許可申請を不許可にしようと思っているわけではなく、申請書類が不備である場合にそれを指摘するだけです。どのようにすれば不備でなくなるかをきいて改善すればよいのです。実際にはむずかしいことはありません。

私自身は、調査研究の計画書をそえたり、調査終了後には成果の概略を報告したりしています。ただし、これらは義務づけられているわけではありません。

これで、さきの文で不十分だった点を補おうと思います。

(次号に環境庁の担当者からの助言を載せるようにしたいと思い、今、その原稿を依頼しています。—編集部)

## ~~~~~ B I R D F I L E ~~~~~

千羽晋示 (東京都大田区)

東京都港区にある自然教育園では約2,500羽のカラスがねぐらをとっています。カラスと地域住民との間にはしばしば紛争がおこります。この問題の解決法、何か名案はないものでしょうか。

私はまた、鹿児島県出水のツルと人間とのかかわり、管理方法などについても調査をすすめています。

最近、私たちの人間社会と摩擦を生ずる鳥類も多くなってきているようですが、こんな現象に興味をもっておいでの方は、ぜひご連絡ください。

東京都心に残る自然教育園にも、ぜひ一度おでかけください。

浜口哲一 (神奈川県平塚市)

生物担当1人の博物館で仕事をしていますので、植物、魚、昆虫といろいろ扱って、いつまでたってもあぶりはとらずな生活を続けています。みんなが参加できる共同調査というのも学芸員の心がけの一つで、野鳥の会神奈川支部の仕事で「神奈川の鳥 1977-86」という、ちょっとユニークな目録をまとめま

した。ねぐら研究会というサークルでは、今冬はユリカモメのねぐらを追っています。その飛行術の巧みさには感激しています。

馬場孝雄 (長野県軽井沢町)

軽井沢に転居して1年半になります。現在私は「国設軽井沢野鳥の森」の管理をしています。最近やっと、軽井沢周辺の鳥と自然の一部が見えてきたような気がします。多くのバード・ウォッチャーにとって軽井沢は新緑の季節に人気があるようです。しかし、その直前、つまり夏鳥が渡来して繁殖を開始するまでの一時期こそ訪れるべきだと思えます。芽吹いたばかりの貧弱な林で、渡来してまもない夏鳥が夢中になって餌をあさり、エネルギーを補給する光景やさええずる姿、なわばり争いなどを間近に見ることができるからです。また真冬も、いろいろの冬鳥を観察することができ、探鳥に適した季節です。

上木泰男 (福井県武生市)

雪深い福井でタマシギとつきあいはじめてから、もう20年が過ぎてしまいました。私はこの地方で越冬する集団の行動を中心に調査と観察をつづけています。昨年、この間

の調査をもとに「雪国のタマシギ」(岩崎書店, 1986)を出版することができました。

田舎にいることの有利さは数多くありますが、不便もまたたくさんあります。これまでの体験から一番不便に感じたのは、学術論文や本など最新の情報を得にくいということです。分類学上類縁関係の近い種、たとえば、アオアシシギ、タシギ、オグロシギ、コバンチドリ、タゲリなどのモノグラフはどうにか、手に入れ、読みましたが、そのほかの種についても知りたいと思っています。もし、最近出版されたシギやチドリの仲間の本をご存知でしたら、ぜひ教えて下さい。

武下雅文(福岡県北九州市)

東経131度線上にある山口県見島、角島、蓋井島、福岡県白島で、鳥相調査に取り組んでいます。見島については10年間の調査資料をまとめる段階にあります。この島では離島振興法による道路整備事業が活発に行なわれ、そのために生息環境が変化し、出現する鳥類の種数が顕著に減少しているようです。

私のフィールドは北九州市曽根海岸一帯で、1976年から7日間隔のカウントを継続しています。1981年からは標識調査をも実施し、これまでに14,000羽以上を放鳥しました。この調査で、ツリスガラやオオジュリンの移動経路について手がかりが得られました。

久貝勝盛(沖縄県平良市)

毎年、寒露(10月10日前後2週間)のころになると、何千羽、ときには何万羽ものサンバが宮古島の空に舞います。こういう風景は昔からこの地の人びとにとってなじみ深いものでした。

私がサンバにとりつかれてからもう15年余になります。いま、つぎのことを重点的に調査しています。1)秋の渡りの状況、2)渡りと気象条件、3)渡りと太陽コンパス、4)集団渡来地とその住民とのかかわり、5)琉球列島における越冬サンバの分布状況、6)越冬サンバの生活、7)春の渡り。もちろん、サンバ以外の鳥についても興味をもち、観察していますが。

この欄では、会員間の交流を深めるため、会員の調査・研究活動の近況を短く紹介して行く予定です。この欄の名を、BIRD LIFEをもじって、BIRDFILEとしました。投稿を歓迎します。200字前後にまとめて送って下さい。

読者の

## 情報

コーナー

白化ホシハジロを見つけたらお知らせ下さい

東京都台東区不忍池に、1986年11月22日～27日の間、全身白化のホシハジロ雌1羽が飛来しました。越冬期間中のカモ類の移動状況を調べています。見つけられた方はぜひお知らせ下さい。

〒110 東京都台東区上野公園

上野動物園飼育課 福田道雄

プラスチック足環の作製

プラスチックに番号を彫刻して足環または

首輪を作りたいと思っている人に、加工をしてくれるところを紹介します(「鳥学=ニュース」№14 p.5参照。永井さんは先年なくなりました)。

東京都江戸川区西小岩3-13-9(〒133)

塩谷彫刻所 塩谷守男

電話 03-659-0381

ただし、納期に余裕のある注文にかぎることです。また少量の注文でもかまわないそうです。材料に足環の設計図をそえ、数量を指定して注文します。必要な場合、字母を指定することもできます。彫刻と折り曲げの加工単価は、彫刻字数にもよりますが、約250円と見積るとよいでしょう。詳細は直接。

(長谷川 博)



鳥学関連雑誌目次のコピー・サービス  
中止について

前号でお知らせした表記の件につきまして  
(№21, p. 9 参照), 誌名と金額を明示して,  
サービス依頼を受付けるということには著作権  
上の問題があるとの指摘を一部の方から受け  
ました。その通りだと思いますので, 勝手な  
がら, 「鳥学ニュース№21」のサービス予

告は取り消させていただきます。

なお, 文献等についての個人的な依頼につ  
いてはできるだけ応じて行くつもりでおりま  
すので, 遠慮なくお申しつけ下さい。

大阪市立大学理学部動物社会学研究室  
山 岸 哲

(この件について, 編集部がゆきとど  
かなかったことを反省します — 編集部)

### 事務局から

## 英文論文の投稿者へのお願い

本学会誌の英文は, すべて外国人の校閲を受けています。現在の英文校閲者はMark Bra-  
zil 博士で, Douglas McWhirter 氏にも時々依頼することがあります。しかし, この  
春には両氏とも帰国される予定で, 国内では適当な後任者を得る見込みがありません。外国人  
による英語の校閲は学会誌にとって欠かせませんので, 編集部としても何とかしたいと考えて  
はいますが, 従来のやり方で外国に原稿を送り校閲を受けようとする, 会誌の発行はますます  
すおくれることとなります。したがって, 当分の間英文原稿の取り扱いを次のようにします。

- ① 英文論文の著者は, 編集幹事に原稿を送付するに先立ち, 適当と思われる英米人の学者  
に原稿を送り, 英文の校閲を受けて下さい。その際, 英語だけでなく, 内容的にも校閲  
してもらい, 原稿の改善に努めて下さい。
- ② 校閲者の氏名・所属を原稿の表紙に記入して下さい。
- ③ なお, 従来どおりに本会を通じて英文の校閲してもらおうことも可能です。しかし, その  
場合は今までより出版に時間がかかるとご承知下さい。

英文論文を発表される方はだいたい研究者なので, 別刷などの交換で知り合った学者に校閲  
を依頼されるとよいかと思えます。ほとんどの学者がていねいにみってくれる筈です。しかし先  
方の都合もありますから, 数人の学者に校閲を依頼すればなお確実でしょう。勿論, 当会とし  
ても英文校閲を依頼できる学者の人選を検討しますが, しばらくはいろいろな個人的関係を利用  
せざるを得ないので, ご協力を願います。なお, 和文論文の原稿(英文の図・表・要約を含む)  
の取扱いは従来どおりです。(森岡弘之)

### 編集部から

## 鳥類研究グループリスト作りにご協力下さい

最近, 鳥学も専門化, 細分化が著るしく, 種やテーマ, 地域ごとにグループを作って研究・  
調査されることが多くなってきました。

そこでどんな団体があるのか, 本誌で取り上げてみたいと思っています。学会員の方で所属  
されている団体やご存知のところがありましたら, 連絡先を下記までお知らせ下さい。

<対象> 純粋な鳥類研究団体の他, 自然保護等のために調査を行なっている団体を含みます。  
大学の研究室や研究機関, 財団・社団法人などは対象としませんが, その支部等で独自の活動  
を行なっているものは含みます。

(〒112) 東京都文京区大塚5-40-10 日大豊山高校 川内 博気付「編集部」宛

『今、なぜキツツキが街中の緑に進出してきたのか』

日時：1987年5月9日(土) 午後2時～5時

会場：日興証券銀座ホール

司会：長谷川 博(東邦大学理学部)

〔話題提供〕

1. キツツキのすむ緑 : 石田 健(東大農学部・大学院)
2. キツツキとくにコゲラの市街地の緑への進入 : 川内 博(日大豊山中・高校)
3. 都市およびその周辺の緑の変遷(仮題) : 未定

最近、東京において従来生息していなかった平地部の緑に、小型のキツツキのコゲラが定着しだしている。また、中型のアオゲラやアカゲラも見かける頻度が多くなっている。キツツキという木に密着して生きる鳥が、緑の少ない東京の平地部へなぜ進入してきたのか。またこの傾向は、埼玉・神奈川・千葉など首都圏各地の平地部で広くみられるほか、大阪や仙台でも報告されている。この興味深い現象を、多方面から討議していきたい。

＜日本鳥学会 評議員・監事選挙結果について＞

1987～1988年度の評議員・監事選挙は、1986年12月20日に投票が締め切られ、23日に開票されました。選挙結果はつぎのとおりです。

1. 評議員開票結果 ( )内は得票数

当選者；阿部学(104)、藤巻裕蔵(83)、長谷川博(130)、樋口広芳(105・辞退)、柿沢亮三(67)、唐沢孝一(92)、川内博(68)、黒田長久(99)、森岡弘之(95)、中村浩志(59)、中村登流(111)、中村司(77)、竹下信雄(71)、山岸哲(120)、吉井正(69)、次点；柴田敏隆(49・繰り上げ当選)。以下、福田道雄(45)、正富宏之(44)、上田恵介(38)、浦本昌紀(38)、その他239名(省略)。 投票総数202票(有効票196)。

2. 監事開票結果

当選者；千羽晋示(42)、森岡照明(32)。次点；福田道雄(16)、以下、川内博(15)、松山資郎(15)、吉井正(15)、その他50名。 投票総数199票(有効票187)(庶務幹事 唐沢孝一)

＜学会誌へ投稿を！＞

学会誌の刊行が大変おくれていて、申し訳ありません。現在35巻2/3号がすでに印刷所に入稿済み、4号の編集に取りかかっています。会誌が順調に出ないと本会の発展は望めませんので、できるだけたくさんの原稿をお寄せ下さるようお願いします。

原稿送り先 (〒079-01) 北海道美瑛市光珠内 専修大学北海道短大 正富宏之宛

＜会計から＞

会費(4000円)の納入をお願いします。会費は前納制です。1年間滞納された方は滞納退会となります。

＜おわび・訂正＞

役員選挙時の被選挙人名簿1ページ2列15行目、紅崎保男氏は江崎保男氏の誤りでした。深くお詫びし訂正いたします。(選挙管理委員会)

訂正 「鳥学ニュース」№20 p.6, l.15 (誤)……こともない→(正)……ことも多い

編集後記

ニュースの編集にたずさわって5年目。いろいろな失敗を通して、その難しさがやっとなりわけてきたところです。これからは叱咤激励下さいますようお願いいたします。

ところで次号はひさびさの実用記事「洋書の買い方」を特集する予定です。(川内)

鳥学ニュース

No. 22

1987年2月28日 発行

(会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
 国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
 (電話) 03(364)2311

発行人 黒田長久 編集者 川内 博・長谷川博 印刷所 文英社印刷